



(金沢大学名誉教授)

二 欣 月 宝

の協力に例をみるように、地元の協力、教育会の援助である。これらの書物が出版された時代には画期的な、多方面にわたる報告書であり、また県の教育会の出版物として出された点においても全国に全く類をみないものであったと思う。学問を大切にする長野県人の伝統をここにうかがうことができる。

次いで総合湖沼学（淡水又は湖沼生態系学といってよい）の主要な部分を占め、それ自身独立した研究分野でもある湖沼生物学について述べたい。湖沼は大小に問わず、周囲の陸地から隔絶された閉鎖系的な系として捉えることが比較的容易であるため、陸地の場合に比してより早くから生態系概念が定着した。このような研究の中心は当然生物学、特に生態学的研究におかれるべきであるが、前記の第Ⅱ期、第Ⅲ期における研究では生物についての個別的、特に分類もしくは分布に関する記載的研究が多く、湖沼という閉鎖系における生物の働きなどにふれるものではなかった。これらの時期における生物学的研究においても諏訪湖その他の長野県下の湖沼での研究で行われた研究はこの方面の研究に先鞭につけたものといえる、例えば中野治房氏による諏訪湖、野尻湖、仁科三湖（木崎、中綱、青木湖）における水草の分布研究などは植物群落やその生態分布を扱ったものであり、これに関連して当時の植物学会誌で数回にわたり川村多実二氏（淡水生物学、動物生態学）との間で行われた論争は植物生態学にかなりの影響に与えたものといえる。

第Ⅳ期は筆者等によって諏訪湖で行われた有機物生産および物質環境に関する研究に始まったと思う。この研究は奇しくも長野県に縁故にもつ北沢石三（都立大、理、生）、故人となった白石芳一、倉沢秀夫（信大、理、生）の諸氏との共同研究で行われた。当時は終戦後の、いうなれば文化的な鎖国時代がまだ継続していた時代で、不十分ながら多くの独創的なものを含むとの自負をもって行われたが、そのいくつかはすでに外国で行われていたことを後になって知った苦い思い出がある。

1965年から7年間にわたって生物学事業計画（International Biological Programme, IBP）が国際協力の下に行われた。この計画は種々の生態系の生産力を地球規模で調べ、人類永遠の福祉の生物学的基礎を明らかにする目的でなされた。湖沼の研究も当然この対象となり、諏訪湖もその1つに選ばれた。これはこの湖が我国で最も古くからよく調べられているためであった。さらに本年からユネスコによる国際協力事

業として Man and Biosphere（MAB 計画）の研究が開始されるが、これにおいても諏訪湖が取り上げられ、倉沢秀夫氏を代表者とする研究班が組織されている。諏訪湖が選ばれたのは句論前記の理由があげられるが、これではさらに近年人為による汚濁が急激に進行しているという、余りうれしくない理由もある。

長野県の湖沼の生物の研究を述べるに際してどうしてもふれたなければならないものに仁科三湖の研究がある。かつては木崎湖の畔りにマスの養殖を兼ねて仁科三湖の調査を行っていた水産試験場（現在上田にある淡水研の研究所の前身）があり、地道な研究が進められ、木崎湖の西岸は「学者村」と呼ばれる、数軒の貸別荘群が林の中にあった。夏季には菅原健、菊地健三氏などが夫人同伴で滞在され、菅原氏は湖沼代謝、菊地氏は水中照度の研究を木崎分場の援助で行っていた。菅原氏の研究は後に名古屋大学の小穴進也、小山忠四郎、西条八束氏等の木崎湖や諏訪湖の研究に発展し、我国の湖沼生物なや湖沼の生物地球化学的研究の近代化、レベルアップに大きく貢献した。

河川に関しては宮地伝三郎、上野益三氏の「上高地及び梓川水系の水棲動物」（1935）は注目に値する研究であった。また、京都大学によって設けられた木曽川の生物学研究所は、諏訪湖に設けられた信大の臨湖実験所に較べると利用のされ方、活動においてやや精彩に欠いているが、溪流生物に関するいくつかの注目される研究を産んだ。

以上に述べたように、長野県下の湖沼で我国の湖沼学や湖沼生物学における画期的な研究が多くなされた。このようなことは他県にみられない所で、強いて求めるならば琵琶湖の場合位であろう。かつては自然性の高い、種々のタイプの湖沼が存在することと、地元の人達の研究への理解や協力が多くの業績を産んだ。近年は人為による急速の水質悪化が著しい湖沼が、比較できる過去の記録があるために脚光を浴びている例が多いのは、如何に“おらが国”として考えてもうれしいことではない。全国的に自然性を残した湖沼が減少している今日、是非とも貴重な財産として残して欲しいものである。最後に、変化の早い湖沼生物を時たま訪れて調べるといった研究のしかたには限界があり、地元の利を生がした研究者の活躍を期待しなければならぬ問題が沢山あることに付言したい。長野県にはそのような期待に応えられる伝統と素地があると思う。

（都立大学名誉教授）